

日常の組織的な授業改善

学校組織

組織的に取り組み、高め合う職員集団づくり

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 年齢を問わず、ICTの活用が積極的である。
- 子どもたちは明るく素直で、学校全体に活気がある。
- 若手教員が多く、個に応じたOJTによる指導が必要である。
- ベテラン・若手ともに、授業改善が進まない。



アドバイザー

☆ 授業改善を図るためには、教育に対する教師の考え方が変わらない限り難しい。例えば「学びを子どもに返す」とはどういうことか、「すべての子どもにわかる授業を」とはどんな授業なのか、具体的な姿でイメージを描けるようにし、全職員で共有して授業改善していきましょう。

☆ 指導力を高めるためには個々に応じて対応するよりも、組織として取り組み、互いに高まることの方が早道です。「意欲が持てる課題づくり」や「わかりやすい板書」など、短期スパンで全職員の課題として取り組み、よい実践を紹介しながら、それをもとに互いに学び合う職員集団づくりを目指しましょう。

《学校の変容》

再度時間をとって学校教育目標や「令和の日本型学校教育」で示されたことについて、本校の子どもたちの姿でイメージが持てるように全職員で話し合い、それを共有して教育活動にあたりました。

子どもたちの正答だけをつないでまとめる授業から、子どもたちが学び合う授業に変わりつつあります。子ども同士が話し合い、納得し合う姿が増えてきました。



校長先生

授業改善の視点を示し、そのよい実践例を写真等で全職員に紹介してみました。その結果、若手・ベテランを問わず、教師同士が日常的に話し合い、学び合う姿が見られるようになってきました。

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

子どもにとって学ぶ必要感のある授業づくり ～小学校編～

《学校の強み（○）と課題（●）》

- アクションプランを踏まえ、校内や学年のつながりを大切にしながら、よりよい授業を目指し協力して取り組んでいる。
- ICTを活用して子どもの思考を可視化するなど、子どもの思考を深い学びにつなげるための創意工夫が見られる。
- 課題設定の仕方を工夫したり、交流場面を設定したりしているが、一問一答や一斉授業のスタイルで進む時間が長くなる。
- 教材研究や思考ツールの活用など、授業づくりの創意工夫が見られる。一方で、子どもの発言や気付きを生かしたい場面でも、教師側の意図した発問や指示が優先されてしまう。



指導主事

☆ 子どものつばやきや気付きはたくさんあります。子どもの思考や発言を見取って深い学びにつなげるためにも、単元や本時における評価場面の見直しや評価方法の工夫を意識していきましょう。

☆ 教材研究をもとに、評価規準を子どもの姿で具体化することで、子どもが実現したいことに向けた課題解決の過程において、子どもが何をものように身に付けていくことになるのか、学習過程を明確にしましょう。

☆ 言葉や図だけの説明でなく、ICTの活用は表現の幅を広げます。また、共有場面で活用することも効果的です。子どもたちの思考や新たな気付きを生かした授業づくりを進めるためにも、タブレットを文房具の一つとして活用できるように意識していきましょう。

《学校の変容》

何のために学ぶのかを意識して授業づくりを進めることで、子どもの学習過程を想定しやすくなりました。また、同僚と授業づくりを行う際も、子どもの必要感を大切にして教材研究を進めています。

子どもが教材や新しい考え方に合った時の驚きや疑問を生かしながら授業づくりを進めることで、学びに向かう姿勢が高まっていることを感じます。

ICTを共有場面で活用することで、子ども自身が新たな視点に気付いたり、次時への学習意欲が高まったりしています。



授業者

日常の組織的な授業改善

学校組織

コロナ禍を経て、ゼロベースから動き始めた学校組織

〈学校の強み（○）と課題（●）〉

- コロナ禍後の「動き出す年」と位置づけ、教師が負担感を感じないよう、アンケートを取りながら急がずゆっくりと方向性を決めている。
- 新たに立ち上げた研究推進委員会を月1回終礼後に開き、そこで話し合われたことは次の週の教科部会で話し合うという流れを作った。
- コロナ禍での数年間は授業研究会に力を入れてこなかったため、教師各々のやり方での授業となっている傾向がある。



アドバイザー

- ☆ 子どもの実態を把握し、教師たちからのボトムUPした悩みや課題意識を出し合いながら、方向性を決めていくことはたいへんいい方法です。
- ☆ 教師の学び合いこそが子どもの学びを支えるものですので、子どもと教師の求める姿、その手立ても全体で共有して進めることが大事です。

〈学校の変容〉

「温かく寄り添う」ことを大切にしている教師たちのもと、どの子どもも集中して学びに向かえるようになってきました。



校長先生

ゼロベースから始めるので「全員で足並みを揃えて取り組もう」と意識づけをしました。「まずはやることだ」と教科部会で研究主題に沿ったテーマを決め、教材研究を進めて、一人1回指導案を書きました。初めて指導案を書く教師や「3観点って何？」という教師もいる中で、学年部も一緒になって話し合いをしました。「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善に取り組む姿に、教師の本分である熱量を感じました。

全国学調の結果がよかった学年の取組みを、全学年でやってみました。朝学習を8回で1クールにし、数学の問題を解いたり、国語の長文を読んだりする自主学習です。終わりの会を使って子ども自身が解説をしたり教え合いをしたりして、最終日に達成指標を決めた小テストをして確実に力が付くよう積み上げてきました。また、振り返りを大切にし、終わりの会で、一つの教科で学んだ内容について振り返りを行い、質問し合う会を開いています。

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

子どもにとって学ぶ必要感のある授業づくり ～中学校編～

〈学校の強み（○）と課題（●）〉

- パフォーマンス課題や評価規準を共有し、教師と子どもたちが共に見通しをもって授業に臨もうとしている。
- 子どもの思考を生かした課題設定や、振り返りを生かした授業づくりをしようという創意工夫が見られる。
- 思考ツールの活用などの工夫は見られるが、教科として育成したい資質・能力が曖昧で、本質に迫られていない。
- 授業において、教師の発話量が多い。また、交流場面は設定されているが、交流することが目的となり、教科の本質に迫るための手立てになっていない。



指導主事

- ☆ 子どもの発言や振り返り等の記載が、教師からの発問や指示に対する回答のみになっている様子が見られます。意図的に自己決定の場を設定することで、子どもが積極的に学びに向かうようになります。
- ☆ 子どもは有能な学び手です。教師の深い教材研究等のもと、子ども自身が課題を解決したくなる授業づくりを進めていきましょう。
- ☆ アウトプットすることは大切です。しかし、交流することが目的となってしまいがちです。子どもたちが何のために学ぶのかという目的をもつことで、子どもたちにとって交流することが必要なものとなります。学ぶ必要感を明確にするとともに、評価規準を子どもの姿で具体化し、子どもたちと共有しながら授業を進めていきましょう。

〈学校の変容〉

学習項目から授業づくりをするのではなく、単元や領域における具体化した評価規準の共有や、自己決定の場を意図的に設定した単元づくりを進めることで、学習活動に前向きに取り組むようになってきたと感じます。

教材研究をもとに評価規準を子どもの姿で具体化することにより、子ども一人ひとりに対する具体的な支援や手立てが見えてきました。また、子ども自身が目的に向けて課題を解決しようとする姿が増えてきました。

単に話し合わせたり交流させたりするのではなく、目的を明確にした授業づくりを意識したことで、子どもたちに交流する必要感が生まれてきたと感じます。



授業者

日常の組織的な授業改善

学校組織

日々の授業が充実する研究体制づくり
～校内研究とアクションプランをリンクさせた学校研究体制づくり～

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 「学習課題づくり」や「主体的・対話的で深い学び」を意識しながら、積極的に授業改善が進められている。
- アクションプランにおける「学期の重点取組み」を全職員で検討し、高める「資質・能力」を焦点化しながら活用している。
- 若手教員の育成のために、校内OJTを活用して主体的に教員の授業づくりの質を高める必要がある。
- 日々の授業とリンクさせた積み上げのある校内研究体制を構築する必要がある。



アドバイザー

- ☆ 学校教育全体を通して育成すべき「学力」と各教科等で育成すべき「資質・能力」、学力向上対策等との相関・関連を図りつつ、教育活動全体を見直し、主体的に改善していく必要がある。
- ☆ アクションプランでは「学期の重点取組み」が焦点化されているが、取り組んだことにより児童生徒の力がどれだけ伸びたのか評価する「評価方法」を工夫して、より「C（評価）A（改善）」を充実させましょう。

《学校の変容》

学期ごとに「アクションプランの取組み」について確認する場を設定していくことで、より意識して取り組む姿勢が高まっています。

「学期の重点取組み」の評価として「学期末評価問題」を作成し、児童生徒一人ひとりを適切に評価し、次のアクションに活かしています。



校長先生

習得・探究・活用のバランスと、個別最適な学びをどのように確保するか単元計画を工夫しています。

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

若手教員の授業力向上を目指して

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 積極的に情報交換しながら、授業づくりを行い、児童生徒が関心を持てるような学習活動を仕組んでいる。
- アクションプランを活用し、日常の授業づくりに取り組んでいる。
- 身に付けさせたい資質・能力を明確にしていく必要がある。
- ねらいに迫る学び合いに改善していく。



指導主事

- ☆ 授業の中で、どのような見方・考え方を働かせるのかを児童生徒と共有しましょう。また、児童生徒が見方・考え方を自覚できるようにコーディネート（問い返す・つなぐ・戻す等）していきましょう。
- ☆ 児童生徒の対話から、自身の思考が深まることが期待できます。話し合う必要性がある課題設定をすることや考えの違いに着目しましょう。
- ☆ 単元で付けたい資質・能力を明確にし、本時は単元の中でどのような位置付けになるのか考え、単元を通した授業づくりを大事にしましょう。

《学校の変容》

同じ教科を受け持つ教員同士が、学習活動だけでなく、単元づくりや評価について相談する場面が多く見られるようになる等、若手教員の「授業力を高めたい」という意識が強くなりました。



授業者

一問一答にならないように、教師の役割であるコーディネートを意識し、児童生徒の発する言葉を大切にしながら授業を進めるようになりました。

付けたい資質・能力を明確にすることで、資質・能力ベースの授業づくりを意識するようになりました。そこから単元をデザインするようになり心掛けています。



授業者

日常の組織的な授業改善

学校組織

主体的に考え、学び合うことによる 教科の学びの本質に迫る校内研究の充実

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 研究教科を設定することで協働的な研究が進められている。
- 「学びに向かう力、人間性等」を軸とする資質・能力に焦点化して、思考の変容や自己の成長がわかる振り返りを共通実践として取り組んでいる。
- アクションプランの活用が十分ではない。どのように活用していけばいいか悩んでいる。



指導主事

- ☆ 全教職員が重点的に取り組むことが明確に設定されており、そのことを意識できる具体策が機能しています。加えて、持続可能な形でOJTを推進していくことも考えられます。
- ☆ アクションプランの目的は、校内研究の一層の推進です。校内研究の取組状況をアクションプランに整理していくことで、PDCAを回していけるようにしていただければと思います。

《学校の変容》

若い教員も、ベテランの先生の授業を見せていただき、「見方・考え方」を意識した子ども達への働きかけにより、思考が変容していく姿を具体的にイメージすることができたようです。



研究主任

アクションプランの目的を再確認することで、学校での取組みを再整理することができました。アクションプランを活用して校内研究の検証、改善をより機能させていきたいと思っています。

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

各教科の見方・考え方を働かせて 深い学びを得る授業づくり

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 指導案に「単元で働かせたい見方・考え方」とそのための「本時の授業者の働きかけ」を明記することにしたことで学校全体で共通認識を持って授業づくりを行っている。
- 特に文章を読み取る力に個人差がある。どのような授業を行っていくべきか試行錯誤している。



アドバイザー

- ☆ 実生活等の場面から教科特有の見方・考え方を働かせながら子どもと共に問題を作っていくような導入場面の工夫も有効です。長い文章の問題にも子どもたちは自分の体験と重ねながら読み解いていくことも期待できると思います。
- ☆ 教職員だけでなく子どもたちとも働かせたい見方・考え方や評価規準等を共有していくことも有効です。

《学校の変容》

授業者が「見方・考え方」を意識した授業を展開することで、子どもたちは見通しをもって学習に取り組むことができていました。

問題づくりから見方・考え方を意識することで子どもたちはこれまで以上に解決の見通しを持つこともできていました。実生活のつながりもこれまで以上に実感できたようで

「見方・考え方」を働かせるためにICTが有効な場面がありました。活用の方法も研究していきたいと思っています。



授業者

日常の組織的な授業改善

学校組織

学校として育成を目指す資質・能力の明確化と
全職員による共有

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 学校として育成したい資質・能力について、意見を出し合う場が設定され、教職員の学校運営への参画意識が高まっている。
- 若手教員とベテラン教員の配置を工夫し、校内OJTを効果的に機能させ、人材の育成を図りつつ安定した職場づくりに努めている。
- 探究的な学びの量だけでなく質の課題が見られる。育成したい資質・能力を明確にした単元づくりを意識していきたい。



アドバイザー

☆ 「学校として育成したい資質・能力」について全教職員で共有する場を設定し、一層の焦点化を図り組織的な取組みを進めていきましょう。

☆ 若手教員の割合が多くなっている中、若手教員の中でのリーダーを育成する等、若手教員のコミュニティを機能させていくことが大切です。

《学校の変容》

「学校訪問シート」を活用することで、客観的に本校の実情や変容を確認することができました。初回も最終も△の項目について全体で共有し、学校として育成を目指す資質・能力とともに、先生方と具体的に話し合うことができました。



校長先生

本校では当たり前と考えていたことを長所と捉えていただいたことで、新たな視点となり、大きな励みになりました。学校研究を中核としながら、今後の授業づくりに反映していきたいです。

各教科の本質に迫る深い学びの実現

授業づくり

単元末のゴールの姿を児童生徒と共有し、
教科の本質に迫る授業づくり

《学校の強み（○）と課題（●）》

- 単元計画を児童生徒と共有することで、学びの見通しを持たせている。
- 「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業改善とともに、生徒指導の実践上の視点を意識した授業づくりも進められてきている。
- 単元を通して付けたい力が曖昧な授業が見られる。



指導主事

☆ 学習指導要領解説や教科書を参考に「単元で付けたい力」を確認し、児童生徒と共有しましょう。

☆ 概念形成に至るまでの過程を大事にしましょう。「できる」から「わかる、理解する」へつながる、習得・活用・探究のバランスを明確にした単元づくりをすることが大切です。

☆ 授業改善を下支えするものとして、「生徒指導の実践上の視点」の観点で日々の実践を振り返ってみましょう。

《学校の変容》

「単元で付けたい力」を明確にし、子どもたちと共有することで、目標、学習過程、振り返りへの見通しを持たせることができました。見通しがあることで、子ども自身が学びの成果を実感でき、次時への意欲につながることができました。

単元末のゴールの姿が明確になることで、児童生徒の思考に寄り添った授業につながりました。このような授業づくりに向けて深い教材研究や子ども理解を大事にしていきたいと思えます。



授業者